

書物の破壊の世界史

——シュメールの粘土板からデジタル時代まで

NUEVA HISTORIA UNIVERSAL DE LA DESTRUCCIÓN DE LIBROS

by Fernando Báez

Copyright ©2013, Fernando Báez

Japanese translation published by

arrangement with Fernando Báez

c/o Schavelzon Graham Agencia Literaria, S. L.

through The English Agency (Japan) Ltd.

ルイス・アルベルト・バエス・ベジヨと
カルメン・エルナンデスへ、
わが両親の思い出に捧げる。

目次

最新版を手にした読者の皆さまへ

012

イントロダクション

019

第1部 旧世界

第1章 古代オリエント

044

書物の破壊はシュメールで始まった 044／エブラほかシリアに埋もれた図書館 049／バビロニア王国時代の図書館 052／アッシュルバニパルの大図書館 055／謎に包まれたヒッタイトの文書 058／ペルセポリスの焼き討ち 059

第2章 古代エジプト

063

初期のパピルス文書の消滅 063／ラムセウム 066／秘密の文書の焚書 068／“生命の家” 069／トートの禁じられた文書 070

第3章 古代ギリシヤ

072

廃墟と瓦礫のあいだに 072／エンペドクレスの詩の破壊 079／プロタゴラスに対する検閲 080／プラトンも書物を焼いた 081／アルテミス神殿の破壊 084／古代ギリシヤの医師 086／ふたりのビブリオクラスタ 087

第4章 アレクサンドリア図書館の栄枯盛衰

089

第5章

古代ギリシャ時代に破壊されたその他の図書館 110

ペルガモン図書館 110 / アリストテレスの著作の消失 113 / 廃墟と化したその他の図書館 125

第6章

古代イスラエル 129

契約の箱と十戒の石板の破壊 129 / エレミヤ書 130 / ヘブライ語聖書の崇拜 131 / 死海文書 132 / 聖書を食べる
預言者たち 134

第7章

中国 136

秦の始皇帝と前二一三年の焚書 136 / 始皇帝以後の書物の破壊 144 / 仏教文書に対する迫害 151

第8章

古代ローマ 154

帝国の検閲と迫害 154 / 失われた図書館の世界 157 / ヘルクラネウムの焼け焦げたパピルス文書 165

第9章

キリスト教の過激な黎明期 167

使徒パウロの魔術書との戦い 167 / テュロスのボルピュリオスの『反キリスト教論』 168 / グノーシス文書 169
／初期の異端 172 / ヒュパティアの虐殺 173

第10章

書物の脆さと忘却 177

無関心による書物の破壊 177 / 使用言語の変化がもたらした影響 180

第2部 東ローマ帝国の時代から一九世紀まで

第1章 コンスタンティノープルで失われた書物 184

第2章 修道士と蛮族 194

図書館が閉ざされていた時代 194 / アイルランドの装飾写本 198 / 中世ヨーロッパの修道院 204 / パリンプセス
ト 206 / 書物の守護者たち 207

第3章 アラブ世界 210

初期に失われた図書館 210 / イスラムを攻撃したモンゴル人たち 214 / アラムトにあった暗殺者たちの図書館
216 / フラグによるバグダードの書物の破壊 218

第4章 中世の誤った熱狂 225

アベラールの禁書 225 / 反逆者エリウゲナ 226 / タルムードその他のヘブライ語の書物 227 / マイモニデスに対
する検閲 229 / ダンテの悲劇 231 / “虚栄の焼却” 232 / キリスト教のなかの異端 236

第5章 中世スペインのイスラム王朝とレコンキスタ 241

アルマンソルによる焚書 241 / イブン・ハズムの禁じられた詩 243 / シスネロスとコーランの破壊 246

第6章 メキシコで焼かれた写本 252

先コロンブス期の絵文書の破壊 252 / 先住民側による自発的な破壊 266

第7章 ルネサンス最盛期 268

グーテンベルク聖書の破壊 268／ピコ・デラ・ミランドラの蔵書 270／コルヴィナ文庫の消滅 271／ミュンスタ
ーの再洗礼派 273／異端者ミシエル・セルヴェ 276／迫害と破壊 280／興味深いふたつの逸話 285

第8章 異端審問 286

異端審問所と書物の検閲 286／新世界における異端審問 294

第9章 占星術師たちの処罰 300

エンリケ・デ・ビリエナの蔵書の破壊 300／トリテミウスの『ステガノグラフィア』 301／ノストラダムスの
発禁処分 303／ジョン・ディーの秘密の蔵書 303

第10章 英国における焚書 307

正統派による弾圧 307／迫害された論客 309／英国の宗教的対立 311

第11章 厄災の最中で 314

ロンドン大火 314／エル・エスコリアル修道院と古文書の焼失 315／アイザック・ニュートンをめぐる書物の
破壊 319／アウルトニ・マグヌッソンの蔵書 320／天災・人災の世紀 322／海賊の襲撃 338／海難事故 339／戦争・
暴動 341／ワシントンの焼き討ちと米国議会図書館の焼失 345／コットン卿の写本コレクションの焼失 348／メ
リダの神学校図書館 351

第12章 革命と苦悩 353

自由思想に対する責め苦 353／フランスにおける知識人への攻撃 356／フランス革命時の書物の破壊 360／啓蒙
専制君主の時代から一九世紀にかけてのよもやま話 362／一八七一年のパリ・コミューン 364／スペインとラ
テンアメリカにおける独立戦争と革命 368

第13章 過剰な潔癖さの果てに 377

ヤコブ・フランク 377／ナフマン・ブラツラフ 380／バートンの忌まわしき原稿 382／猥褻罪による焚書 383／
ダーウインと『種の起源』 384／ニューヨーク悪徳弾圧協会とコムストック法 385

第14章 書物の破壊に関する若干の文献 387

第15章 フィクションにおける書物の破壊 400

第3部 二〇世紀と二二世紀初頭

第1章 スペイン内戦時の書物の破壊 424

第2章 ナチスのビブリオコースト 443

第3章 第二次世界大戦中に空爆された図書館 476
緒戦 476／フランス 477／イタリア 478／英国 479／ドイツ 480／終焉 484

第4章

現代文学の検閲と自主検閲 487

ジョイスに対する攻撃 487／著作が破壊されたその他の作家たち 489／北米における国家の検閲 490／迫害された作家たち 492／サルマン・ラシュディ対イスラム原理主義 493／作家が自著を悔やむとき 495

第5章

大災害の世紀 502

翰林院と『永楽大典』 502／日中戦争 504／記憶が危機にさらされるとき 507／スペイン科学・研究高等評議会の蔵書 514／図書館の二大火災、ロサンゼルスとレニングラード 517／アンナ・アマリア図書館 520

第6章

恐怖の政権 522

ソビエト連邦における検閲と焚書 522／スペインのフランコ主義 531／検閲政権 534／中国の文化大革命 537／アルゼンチンの軍事政権 540／チリの独裁者ピノチエトと文化に対する攻撃 551／原理主義者たち 559／アフリカにおける大惨事 560／パレスチナ、廃墟と化した国 561

第7章

民族間の憎悪 563

セルビアの書物殺し 563／書物のないチエチエン 574

第8章

性、イデオロギー、宗教 577

性の追放 577／文化の「肅清」 578／学生が教科書に抱く憎しみ 582／『ハリー・ポッター』事件 585／コーランの焚書騒動 586

第9章 書物の破壊者 589

書物にとっての天敵 589／自滅する紙 594／唯一残った書物 598／出版社や図書館 601／税関 602

第10章 イラクで破壊された書物たち 603

第11章 デジタル時代の書物の破壊 632

図書館に対するテロ 632／ワールドトレードセンターに対する攻撃 633／書籍爆弾事件 634／紙の書籍 vs 電子書籍 636

謝辞 643

原注 687

参考文献 724

人名索引 739

本を燃やす人間は、やがて人間も燃やすようになる

——ハインリッヒ・ハイネ『アルマンゾル』（一八二一年）

燃やされた本それぞれが世の中を照らし出し……。

——ラルフ・ウォルド・エマーソン『随想、第一集』（一八四一年）

ありとあらゆる図書館の書架をことごとく破壊せよ。

——フィリップ・トンマーゾ・マリネッティ『未来派宣言』（一九〇九年）

隣の家にある本は弾を込めたピストルだ。

焼いてしまえ。ピストルの弾を抜くんだ。

人間の精神を支配せよ。

——レイ・ブラッドベリ『華氏四五一度』（一九五三年）

最新版を手にした読者の皆さまへ

物心がつく頃から、おそらくは読書なしでは生きていかなないと悟って以来、学識者と呼ばれる人々が書物の終わりを声高に叫ぶのを耳にしてきた気がする。そんな私にとって書物の終わりは、つい最近まで世の中を賑わしていた二〇一二年の人類滅亡説、いわゆるマヤの予言と呼ばれるものに匹敵するテーマである。そこで最新版（二〇一三年）の出版に寄せた本稿を、アフガニスタンのとある書店主の言葉で始めようと思う。悪条件下を生き抜いてきた彼が、とりわけ最悪の時に口にした「書物はなくなるだろうが、人々はそのことにすら気づかないかもしれない」。パレスチナ系メキシコ人思想家のガブリエル・ザイドが、著書『多すぎる本』に記した《火・車輪・文字という（原始人が作ったにもかかわらず、いまだ他の追従を許さない）数万から数千年来の発明品の消滅を予言する専門家はいいないが、本の消滅を告げる予言者たちには事欠かない》にも相通じる発言だ。

書物は魔力を失った。インターネットやケーブルテレビが発達したグローバル社会で、本はもはや重要ではない。そう考える人は二〇一〇年九月に起こった出来事を思い出してみろべきだ。冷戦後唯一の超大国となった米国で、九月一日のニューヨーク同時多発テロ追悼に際し、コーランを燃やすと宣言したひとりの牧師を思いとどまらせるべく、政府と軍の高官が動いたことは記憶に新

しい。ニュース番組のコメンテーターのなかには、大げさに騒ぎすぎだとの向きもあったが、私は一歩間違えば大惨事になるところだったと見ている。しかも問題はそこで終わったわけではない。われわれが生きる二一世紀は、たったひとつの神聖なシンボルの破壊が戦争の引き金となる可能性も高いのだ。

形を変えて現代もなお続く異端審問の事例としては、同じ二〇一〇年九月に米国防総省が取った奇妙な措置——国防情報局職員アンソニー・シェーファー大佐の著作『オペレーション・ダークハート』九五〇〇部を買い占め、焚書にすると決めた——が挙げられる。国家の安全保障に関わる情報が含まれているとの理由からだ。だとすると、米国の外交機密をネット上に掲載したかどで非難・迫害されているオーストラリア人ジャーナリスト、ジュリアン・アサンジが、ウィキリークスで公開した全情報を本として出版したらどうなるか？ 後先を考えずに目障りな書物をことごとく抹殺する。そんな無謀な政策は、中国でさえも取っていないはずである。

私の父は「書物と図書館は無処罰特権や教条主義、情報の操作や隠蔽に対抗する伏兵だ。その事実を人々はすっかり忘れてしまっているが、けっして忘れるべきではない」と強く主張していたが、彼の言い分は正しかった。抑圧者や全体主義者は書物や新聞を恐れるものである。それらが「記憶の壟壕」であり、記憶は公正さと民主主義を求める戦いの基本であるのを理解しているからだ。

二〇〇四年に『書物の破壊の世界史』初版が刊行されると、あまりの反響の大きさに、私は自分が文明の古傷に触れたのを実感した。何よりも書物が伝える記憶の価値を大勢の読者に認識してもらえたことが嬉しかった。本書をきっかけにシナゴーク（ユダヤ教の会堂）に招かれ、ゲニザという不要になった書物の保管庫を見せていただく貴重な機会にも恵まれた。また、リオデジャネイロで出会った男性に「僕は人々が引越しの際に処分した本を集めて図書館を開いているけど、あなた

の著作も一緒に並べたからね」といわれたことも印象に残っている。

ここで、巻末に付した謝辞に載せきれなかった人々に御礼申し上げたいと思う。私自身、スペイン語圏内に多少のつながりがあるとはいえ、ギジェルモ・シャベルソンなくして、本書が地球規模で広がることはなかった。彼は国際的に知名度の高い偉大な出版エージェントというだけでなく、喜びの時には苦難の時には真の友人でいてくれた。シャベルソンとスタッフ全員、特にバルバラ・グラハムとハコバ・カシエルには感謝してもしきれない。

本書をきっかけに、書物の破壊のテーマでさまざまな討論を展開してくれたメディアの存在も大きな後押しとなった。文化的な側面の情報源としても、以下のテレビ・ラジオ局、各紙誌のジャーナリストの皆さまには、日頃から大変お世話になっている。イギリスのBBC。オランダのラジオ・ネーデルラント。フランスの『ル・モンド』紙。イタリアの『レスプレッソ』誌。スペインのラディオ・ナショナル・デ・エスパーニャ、カデナ・セル、カタルーニャ・ラディオ、『エル・パイス』紙、『ラ・パングアルディア』紙、『ABC』紙、『エル・ムンド』紙、『ラ・ラソン』紙、『エウロパ・プレス』紙、『ウルティマス・ノティシアス』紙、『エル・フィナンシエロ』紙付録の文化誌『カルトゥラル』誌、『ケ・レエル』誌、『ムイ・インテレサンテ』誌、『レトラ・インテルナシオナル』誌、『クオ』誌、『エドゥカシオン・イ・ビブリオテカ（教育と図書館）』誌、『ラテラル』誌（バルセロナの偉大なる本の付録誌）、レベリオン（インターネット・ニュースサイト）。アメリカのCNN、『ニューヨークタイムズ』紙、『ボストン・グローブ』紙、『ザ・ニューヨーカー』誌、『インタナショナルインフォメーション&ライブラリー・レビュー』誌。メキシコのTVアステカ、『エル・ウニベルサル』紙。グアテマラの『プレンサ・リブレ』紙。コスタリカの『ラ・ナシオン』紙。ベネズエラのテレスール、『エル・ウニベルサル』紙、『エル・ナシオナル』紙。コロンビアの『エ

ル・ティエンボ』紙。チリの『エル・メルクリオ』紙、『ラ・テルセラ』紙。ブラジルの『オ・グローボ』紙、『ベジャ』誌、『エンコントラルテ』誌。アルゼンチンの『ラ・ナシオン』紙。ベトナムのVTV。そしてEFE、UPI、AFP、ロイターなど、数々の通信社。

友人である小説家、カメラマン、映画監督たちの多くが、拙著からインスピレーションを得てくれたことも嬉しい驚きだった。アルゼンチンのジャーナリストで歴史家、劇作家・俳優でもあるホルヘ・ゴメスは素晴らしい戯曲『ビブリオクラスタ（書物の破壊者）』を上演。同じくアルゼンチンの作家カリナ・マグレギは本の擁護者たちの守護聖人である聖女ヴィボラの生涯を復元し、出色の小説『悪を感じず、燃えつつ生きる』を上梓した。アレハンドロ・セルパはビブリオコースト（書物の大量虐殺）を論文のテーマに選び、チリの映画監督レネ・バジエステロスはドキュメンタリー『熱傷』を制作した。カリン・バジエステロスはチリにおける書物の破壊に関する初の本格的研究に着手。メキシコのエッセイスト、ラファエル・トリスは傑作短編『エル・ビブリオフアゴ（書物を食う男）』を執筆した。イラクの詩人ファロク・サッロームは二〇〇三年に私が撮影した写真をもとに、全篇にわたってイラクにおける破壊をテーマにした詩集を出版し、アルゼンチンのビジュアルアーティスト、ファビアン・トリゴは禁書の索引カードをモチーフにした個展「セクレト（秘密）」を開催した。同じくアルゼンチンのアーティスト、テューラ・ヒルデン&ピオ・ディアスは世界の文化遺産が火災に見舞われるシーンを作品上で再現。ロンドン生まれでマドリードを拠点に活動している写真家のエイドリアン・タイラーは破壊された書物を撮り続け、写真集『塵は塵に』を刊行し……と枚挙にいとまがない。

スペイン国立図書館にて、『教育と図書館』誌のラモン・サラベリアとメキシコ・グアダラハラ公立図書館の館長を長年務めたブランカ・カルボが企画した「戦時下の図書館」展のイベントに、

英国人作家ロバート・フィスクとともにゲスト出演できたのも光栄だった。また私の文章の一部が、ペドロ・ロペスとハビエル・ヒメノ・ペレリョの叢書『噴火寸前の火山——図書館と社会的義務』に収録されたことも喜ばしく思う。

トマス・ソラーリとウーゴ・ガルシア（故人）からの称賛も一生忘れられない。それと進取の気性に富んだアルゼンチン国立図書館の図書館員たちのことも。彼らは何と二〇〇六年に、私の名前を冠したコンクール「フェルナンド・バエス・ラテンアメリカコンクール——図書館・古文書館・博物館における盗難・弾圧と抵抗」を開催し、二〇〇八年には入選作を一冊の本『ビブリオクラスタ』にまとめて出版した（ブエノスアイレス大学出版）。ラ・プラタ市の検閲に関する優れた論文で最優秀賞を受賞したフロレンシア・ボッシーをはじめ、作品が掲載されているクリスティアン・ホセ・オリベイラ・サントス、ルイス・オポルト、ダニエル・カノサ、シルバナ・ボナッチ、フェデリコ・サバリヨス、ベアトリス・ケスラー、フリアン・バルスキーも、私の言葉から着想を得て、今日書物の破壊をテーマとする研究に献身している。

スペインでの初版の出版から一〇年近くが過ぎた二〇一三年、本書はメキシコの出版社から再版されることになった。私はこれを機に、読者に改めて真剣な討論のテーマを提供できると考えた。そこで、レイアウトを調整して旧版よりもゆったりと組み直し、本文にも手を加えて通りのよい文章に書き換えた。とはいえ、自分ひとりで成し遂げたわけではなく、何十人もの友人や傑出した編集者たち、一七カ国語に及ぶ素晴らしい翻訳者たちと熱心な読者各位のお知恵を拝借した。だからこの最新版は、本書の内容をより豊かにするために、貴重な時間を割くことを厭わぬ方々の尽力の賜物ともいえるだろう。

初版のイントロダクションのようにあえて削除せず残した部分もあるが、この一〇年間に会合や

講習、研修会や講演会で尊敬する同僚たちと議論し、自分なりに達した結論を要約したビブリオコースト（書物の大量虐殺）とメモリンディオ（記憶殺し）の理論を、中間報告という形で盛り込むことにした。

このほか旧版と大きく変わった点としては、中国における書物の破壊に関する新たな項目をつけ加え、中東・アフリカで消滅した図書館やマヤ・アステカ文明の失われた古文書に関するさらなる情報を提供するよう努めた。中世フィレンツェでドミニコ会士ジロラモ・サヴォナローラが行なった「虚栄の焼却」、一九七〇年代から八〇年代にかけての、アルゼンチンとチリの軍市政権による書物の破壊の項目も充実させた。また、スペイン科学研究高等評議会の人文社会科学部門の蔵書や、ドイツのアンナ・アマリア図書館を焼き尽くした火災の情報も追加した。

本書の初版本は二〇〇六年の時点で、すでにスペイン語圏、ポルトガル語圏を中心に、さまざまな版が出ていたが、ある謙虚な匿名の読者から、小説中に描かれた書物の破壊についても検証してみてもどうかと提案された。気が遠くなるような作業になると、ためらわれたものの、必要な作品は自分が勤める図書館にはぼろ全作揃っているではないかと気づき、調査を進めることにした。その結果、焚書が描かれた最初の事例はヨーロッパ近代文学の幕開け的作品ともいえる、ミゲル・デ・セルバンテスの『ドン・キホーテ』であることが判明したときには、喜びもひとしおだった。

その努力は、第二部第一章「フィクションにおける書物の破壊」として結実した。ちなみにそこで取り上げた小説のなかで、私のお気に入りにはボッミル・フラバルの短編小説『あまりにも騒がしい孤独』だ。長年古紙の圧縮処理に携わってきた男が、日々破壊される書物に抱く郷愁に魅了され、何度も繰り返し読んでいる。

二〇〇三年に勃発したイラク戦争の影響はいまだ尾を引いている。私は六回バグダード入りした

が、時宜を得た図書館や博物館の復興プロジェクトは（実現しなかったものの）非常に重要だと考えている。同じく近年のアフガニスタンにおける復興や、九月一日を『世界コーラン焚書デー』にしようとした、先述のテリー・ジョーンズ牧師についての研究の成果なども加筆した。電子書籍の章は時代の流れに應じて修正を加え、参考文献も更新してある。

私にとっての関心事は答えよりも問いに出会うことだ。この年齢でそれに気づいたのは幸運だった。本書には歴史上・宗教上の異説や異端が出てくるが、定説や正統派というものも非常に曖昧な定義であることを念頭に置いておくべきだ。アリストテレスは哲学が驚きから始まるといったが、私自身は失望から生まれるものだと思っている。ある意味このノンフィクションは、歴史を前にした驚きと失望という両義的な感情がもたらした、私の無邪気な好奇心から生じたのではないかと踏んでいる。

最後にひとつはつきりさせておきたい。本書のタイトルを『書物の破壊の歴史』ではなく『書物の破壊の世界史』としたのは、世界中で起こっている身近な問題として捉えてほしかったからだ。この種々雑多な論文集ともいえる本書は、ロバート・バートン著『憂鬱の解剖』、フラン・オブライエン（ブライアン・オノラン）著『スウィム・トゥー・バーズにて』、フリオ・コルタサル著『石蹴り遊び』に借りがある。本書の読み方をとにかくいうのは本意ではない。読者の皆さまそれぞれが読みたいように読んでくだされば本望だ。死や忘却に対峙する必要が生じた際に、頼りになる座右の書あるいは護符として機能すれば幸いである。

イントロダクション

バグダードの謎

「もはやわれわれの記憶は存在しない。文字や法律の揺りかご、文明発祥の地は焼失した。残っているのは灰だけだ」

この言葉はバグダード大学で中世史の教員が口にしたものである（これを発した数日後、この教員はバース党に所属していたとの理由で逮捕されたという）。近代的な大学の構内は、教室も研究室も破壊され、略奪に遭ったあとだった。図書館の蔵書も例外ではない。その教員はひとり、大学の玄関先で絶えず物陰に隠れるようにしていた。あの言葉は彼の独白だったのかもしれないし、あるいは中東でよく耳にする、果てしなく続く囁き声に唱和していただけかもしれない。彼は私の姿を認めると、瞳を潤ませた。おそらく誰かを待っていたのだろうが、待ち人來たらず、間もなく大学をあとにする後ろ姿が見えた。当てもなくさまようように、校舎のそばにミサイルが空けた巨大なクレーターを避けて去っていく。

しかしそれから数時間後、教え子のひとりが思いつめた表情で私に話しかけてきたことで、彼の

言葉は意義を与えられることになる。茶色の長衣にサンダル姿、眼鏡をかけた学生は、丹念に切り揃えたひげを蓄えてはいたが、年齢はかなり若そうだった。二〇歳から二二歳ぐらいだろうか。正義感に燃えて物申すには打ってつけの年頃だ。話しかけてきたとはいっても、私を見るわけでも別の場所を見るわけでもなく、うつろな目をして訊いてきた。「どうして人間はこんなにも多くの本を破壊するのか」と。

学生は落ち着いた声で問題提起したあと、何かの一節を口ずさみ始めた。どうやらあまりよく覚えていないらしく、言葉に詰まって続かなくなると再び私に同じ問いを投げかけた。イラクは何世紀にもわたって文化の破壊と収奪の被害を受けてきた。「あなたは専門家でしよう？」皮肉まじりに問い詰める。彼の名はエマド。左手に擦り切れたペルシャの詩人の詩集を携え、乾いたヤシの枝をしおり代わりに挟んでいる。正直に告白すると、私は彼に返す言葉が見つからず、黙ってその場から退散した。構内の廊下の至るところで口論が始まり、巻き込まれたくなかったからでもある。ホテルの部屋に戻って、自分のペースを取り戻し、じっくりと腰を据えて考えるのに不可欠な心のゆとりが生まれると、あの場で受けた困惑は自分の考えを見つめ直すきっかけとなった。

あれから何カ月も経っているのに、なぜ今になって事の重大さをひしひしと感じるのかわからないが、あの時の出来事が記憶の奥底にこびりついて離れない。もしかすると自分は何もわかっていないのではないか、どんなに理論づけようとしても、惨劇を前にしては何もかも無駄で、間違っているのではないか、との思いが頭をもたげてくる。だがたとえそうだとしても、私は自分自身の経験に基づき、自分なりの結論を導き出してバグダードの学生の問いに答えねばならない。それが彼の問いの価値に報いる唯一の道だと考える。このイントロダクションの意図は、それ以上でもそれ以下でもない。

二〇〇三年五月バグダードに現地入りした際、私は文化の破壊の新たな形に直面した。それは見てぬけふりをするという間接的な加担でなされていた。米軍による首都制圧後、「一九五四年ハーグ条約（武力紛争の際の文化財の保護に関する条約）第一議定書」、七二年の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」、九九年の「ハーグ条約第二議定書」の条項に反する怠慢さと浅薄さ、思慮のなさによる文化財の消失が始まった。米兵たちはイラクの文化施設を破壊こそしなかったが、守りもしなかった。この無関心さが犯罪グループによる収奪にお墨つきを与えた。犯罪組織による蛮行のあと、サダム・フセイン政権の象徴への憎悪を煽る、一連のプロパガンダに触発された無知な群衆による略奪行為が続いた。博物館や図書館がその国の権力機関と同一視された事実を忘れてはならない。そしてそれらの施設が壊滅したのは、沈黙が大惨事を正当化したからにはかならないことも。

二〇〇三年四月一二日、イラク国立博物館略奪という衝撃的なニュースが世界中を駆けめぐった。多大な価値のある展示品三〇点ほか一万四〇〇〇点以上の所蔵品が盗まれ、展示室が破壊された。四月一四日には国立図書館でおよそ一〇〇万冊の蔵書が焼かれる。国立古文書館にも火が放たれ、一〇〇〇万点以上のイラク共和国やオスマン帝国時代の記録が焼失した。その後、数日間のうちにバグダード大学付属の複数の図書館、ワクフ図書館、イラク国内にある何十もの大学の図書館が、同様の被害を受けた。

バスラでは中央図書館、バスラ大学附属図書館、イスラム図書館とともに自然史博物館が燃やされた。モスルでは博物館内の図書館が、プロの窃盗団による古文書の盗難と放火の被害に遭った。賊は価値ある古文書だけを選んで持ち去り、残りの蔵書に火を放ったのだ。ティクリートでは博物館の建物が爆破され、警備員たちが逃げ出したことで、容易に強奪が行なわれた。

この予期せぬ大惨事に、監視の目が行き届かぬ何千もの遺跡の襲撃が追い打ちをかける。貴重な考古資料の国境を越えた不正取引は、前代未聞の規模になりつつある。武装した盗掘グループがハトラ、イシン、クラル・ジャブル、クウンジュク、テル・センケレ、テル・アル・ジュベイト、ジャウハ、ウル、ウムアルカラブといった遺跡の発掘現場を荒らす。ヘリコプターやパトロール隊の巡回が通り過ぎるや舞い戻って盗掘を再開、遺物を粗末に扱い、壁画を破壊した。国外に持ち出された出土品は、クウェートやダマスカス経由でローマやベルリン、ニューヨーク、ロンドンへと運ばれ、金に糸目をつけぬ個人蒐集家たちに言い値で買い取られる。それにしても、書物の生まれたこの土地でメモリシディオ（記憶殺し）が発生するなんて。偶然にしても皮肉な話だが、この謎は容易に解けそうもない。

書物の破壊の狭間で

イラクで目にした光景で、私は自分が生まれて初めて破壊された書物を見た目のことを思い出した。確か四歳か五歳だったと思う。当時わが家は極貧状態で、町の図書館は私の唯一の拠りどころだった。私の父は弁護士だったが不正を拒んで失業中。代わりにスペイン・カナリア諸島出身の母が手芸品店で、『オデュッセイア』の主人公オデュッセウスの妻ペネロペのごとく、来る日も来る日も縫っては解く衣服の修繕をして家族を養っていた。そこで幼い私は毎日、地元シウダーアヤナのサン・フェリクスで町立図書館を開いていた家に預けられた。義理のおばがその図書館に秘書として勤めていた関係でだ。親切にも彼女は私の好きなようにさせてくれたので、私は一日中、図書館の中で書架と本に囲まれて過ごした。

読書の価値を見いだしたのもそのことだ。読むよりほかにすることもなく、読まざるを得な

かった事情もあるが、よい本にめぐり合うたびに、また読もうという気力が湧き、さらに読書熱が高まる結果になった。読書の手引きも図書目録も、文芸批評選集も週末の新聞書評もそちのけで、「古典」という棚のラベルも気にせず、片っ端から読みふけた。書物に対する私の関心は半端ではなく、本は唯一の友人だった。当時の自分が幸せだったかどうかはわからない。ただ少なくとも大好きな本のページをめくっているあいだだけは空腹も貧困も忘れていられた。私を恨みや不安から救ってくれたのも書物だった。

本を読んでいる限り、何時間ひとりぼっちにされても、孤独感を覚えることはなかった。他の多くの子どもたちと同様に、私もジュール・ヴェルヌやエミリオ・サルガリ、エドガー・アラン・ポー、ロムロ・ガジェゴス、ウィリアム・シェイクスピア、ロバート・ルイス・ステイヴンソンに夢中になり、百科事典に掲載されたカラー図版の数々に心を奪われた。どの百科事典だったか、今となっては思い出せないが、月面着陸したロケットの写真は幼い私には感動的で、大きくなった自分も宇宙飛行士になりたいと夢見たりもした。穴のあいたズボンに継ぎはぎだらけのシャツ、くしがないので枕に寝押しして整えた頭髮。そんな貧しい子どもが宇宙飛行士だなんて、他人が聞いたら大笑いしたかもしれないが、私は本気でそう思っていた。書物で語られていることはすべて本当だと信じていたので、臨終の床にいるドン・キホーテの挿画を見たときには泣いてしまったほどだった。

そんな至福の時に突然終止符が打たれる。オリノコ川の支流に当たるカロニ川が、警報を発する間もなく増水・氾濫し、町が洪水に襲われたのだ。私の好奇心の源泉だった本も被害を免れなかった。小さな図書館はどす黒い水に破壊され、蔵書は全滅、私は拠りどころと幼少期の思い出を失った。その後しばらくは頻繁に、ステイヴンソンの『宝島』が濁流に飲み込まれていくさまや、シ

エイクスピアの戯曲が流されていく場面を夢に見た。

本が奪われるという恐ろしい幼児体験は、私にとって克服できないトラウマとなった。しかも奇遇にもそれが唯一の体験ではなかったのだ。ゲートは若い時分フランクフルトで焚書に遭遇し、「無生物を罰するとはどういうことだ」と憤慨している。私の場合は高校に通っていた一七歳の時だった。学年末の修了式直後に同級生たちが教科書を燃やした。誰も彼もがあまりに興奮していて事前に制止できず、必死になって火を消そうとした私は、皆の嘲笑的になった。一九歳で百科事典のセールの仕事に就いたときにも、悪夢が繰り返された。足繁く通っていた古書店が火災に見舞われ、全焼したのだ。両手にやけどを負った店主が静かに目を閉じ、悲しみをこらえる姿は、今でも鮮明に脳裏に焼きついている。一九九九年には調査団の一員としてボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエボを訪れ、廃墟と化した国立図書館と対面した。現場で知り合った美しい女性詩人（名前はあえて伏せておく）が私に告げた。「破壊された本の一冊一冊が、地獄へのパスポートよ」。同年、またしてもベネズエラの地方図書館が地滑りで崩壊し、現地向かった。二〇〇〇年にはコロンビアの諸都市をめぐる、同国を荒廃させた内戦で破壊の憂き目を見た図書館の実態を調査することになった……。

意識的か無意識かは定かでないが、いつしか私は書物の破壊というテーマに取り憑かれ、気づいたときにはそれらの事例について語る本の執筆準備をしていた。二〇〇一年、そんな私のもとに送られてきたずっしりと重い箱は、期せずして私の研究の礎石となった。郵便配達人は私に受領書を手渡すと、カラカスからの荷物だと告げ、サインを求める。箱には直接封筒が貼りつけてあり、中には書類が一枚と判読できない文字で署名された簡潔な報告書が入っていた。箱の中身は本らしく、父方の祖父ドミンゴの唯一の遺産とのことだった。死に際し祖父は、遺言状でそれらを私に遺贈す

ると記したが、先日亡くなったばかりのおじが保管していたのだと報告書では説明されている。信じられないことだが、私は生前の祖父に会ったことがない。傑出した靴職人だったらしいが、祖父の話は家族からはほとんど聞かされていなかった。

油とタバコの脂が染みついた箱の中には約四〇冊の本が入っていた。いくつかは人にあげ、目を引いたものだけ手元に残した。そのうち一冊がウィリアム・ブレイズの『書物の敵』（一八八〇年）で、本を破壊する諸々の要因についての興味深い解説がなされていた。これは何かの兆しに違いないと予感し、感動も冷めやらぬまま実家に直行した。父は母とふたりで年金生活をしており、パーキンソン病を患っている。ふだんはほとんど感情を表に出さないが、祖父からの奇妙な遺産相続の話をする、いつになく饒舌に語ってくれた。祖父は歴史の謎が大好きで、息子である彼とよくアレクサンドリア図書館の話で盛り上がったという。帰り際、父に力強く抱擁されたとき、私は自分の研究の方向性が決まったと確信した。

私は幼い頃から書物の破壊に怯えて生きてきた。自分が“アレクサンドリア”“ヒュパティア”“検閲”といった言葉に敏感に反応し、危惧の念を抱くことにも気づいていた。そんな私に向けられたバグダード大学の学生からの問いかけは、一刻も早く自分がこれまで書きためてきたものをまとめ、今もなお続く文化的大惨事の数々を世界に知らしめるべきだという義務感を芽生えさせた。五〇世紀以上も前から書物は破壊され続けているが、その原因のほとんどは知られていない。本や図書館に関する専門書は数あれど、それらの破壊の歴史を綴った書物は存在しない。何とも不可解な欠如ではないか？